

立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）
大学院学生研究
2022年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション 研究科異文化コミュニケーション 専攻		
研究代表者 (2023年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年		氏名
	<input checked="" type="checkbox"/> 博士前期課程 3年 <input type="checkbox"/> 博士後期課程 年		張威
指導教員	所属部局・職名		氏名
	異文化コミュニケーション学部 教授		奥野克巳
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 人文 ・ 社会	個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題	茶栽培のコモンズをめぐるマルチスピーシーズ民族誌 ——日本茶の栽培を事例として——		
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2023年3月現 在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士課程前期課程 3年		張威
研究期間	2022 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

マルチスピーシーズ(多種の)民族誌はこれまで、人間を含む複数種の絡まり合いを主題として調査研究を進めてきたが、おもに人間と動物種が扱われ、植物が取り上げられることは稀であった。こうした状況において本研究は、植物、特に茶を取り上げる。その際、マルチスピーシーズ民族誌の新動向である「フェラルなもの」の人類学を概観する。それは、自然の種が、人間の作り上げたインフラストラクチャーを媒介することで、新たな野生としてリメイクされる、あるいは「野良化」していく動的なプロセスに注目する。その上で、「フェラル・バイオロジー(feral biology)」を提唱したサラ・ベスキーの議論を踏まえて、それを日本静岡県茶栽培の事例に基づいて検討を加える。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 茶栽培 } { フェラル・バイオロジー } { マルチスピーシーズ民族誌 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**1. 研究内容**

本研究では、インドの紅茶プランテーションにおける「多種との関係性」と「代替経済」を論じたサラ・ベスキーの「フェラル・バイオロジー」の議論を用いて、静岡県の手原郡川根本町と掛川市の東山地域の二つの地域における民族誌調査を通して得られたデータを解析し、茶栽培の「フェラル・バイオロジー」を描き出す。

具体的には、第一に、川根本町の「川根茶魂」という献茶祭を中心に、茶産業のインフラストラクチャー（以下ではインフラと略す）によって自然がいかにリメイクしてきたのかを探り、人間がどのようにリメイクされる自然とのコモンズや関係性を築いてきたのかを考察する。第二に、静岡県の茶産業が疲弊している一方で、茶をブランド化したり、生物多様性を保護したりして観光地化を推し進めるといふ、独自の「代替経済」がどのように行なわれているのかを論じる。

2. 「フェラル・バイオロジー」とは何か？

ベスキーは、インドのドーアルズ地方における安価な紅茶とモノカルチャー（単一栽培）の労働をめぐる調査を行った。「モノカルチャー」とは、独立したひとつの資産だけが考慮されるように景観を変えていく。その資産以外のすべてが、雑草かごみとみなされてしまうとベスキーは論じている[Besky 2019 : 25]。モノカルチャーとは、「酷使された自然」でもある。そのため、モノカルチャーの対象とされるのが植物であれ動物であれ、すべて疲弊しているように見える[Besky 2019 : 26]。

ベスキーはまた、ドーアルズの紅茶プランテーションで、モノカルチャーとしての紅茶栽培が、労働者の新たな「多種との関係性」を生み出し、会社が運営する住居、衣類、食事、医療などのインフラを疲弊しながらも持続させざるを得ない「代替経済」を生み出したと論じている[Besky 2019 : 26 ; 奥野 2022 : 111]。それらは、アナ・チンの言う「資本主義の荒地」において現れる傾向にある[チン 2019]。以下では、ベスキーの掲げる「多種との関係性」と「代替経済」からなる「フェラル・バイオロジー」を概観してみよう。

(1) 多種との関係性

まず、ベスキーの『ダージリンのディタンクシオン：インドのフェアトレード紅茶プランテーションにおける労働と正義』を取り上げてみよう。インドのダージリンの紅茶プランテーションでは、「赤ん坊の」茶樹、「年老いた非力な」茶樹、女性労働者、インフラ、男性の管理者、人間と非人間の両方に死を与える「地滑り」などが複雑に絡まり合って、現実世界を構成している。サトウキビ、コーヒーなどの産業作物とは異なり、茶樹は1年に10カ月間、定期的に剪定と摘採が行われる。茶樹は60年から70年の寿命を持つ。茶栽培は、子育てのように決して急がせることができないとされる。だから、茶樹も女性労働者も、長くプランテーションで暮らしている住民であると考えられる[Besky 2013 : 65]。

そのため、茶摘み労働者たちは、茶樹に対して自らを「母親」や「祖母」と言うし、男性の管理者たちは、プランテーションで働く女性にとっての父的な「おじさん」とも言ったりする。つまり、人間と植物がともに親族関係のようなものを築いていると感じられているのだ。労働者たちは、茶樹「の傍で」世界を経験するのではなく、茶樹「とともに」世界を経験する[Besky 2013 : 65-66]。

ここで見たように、紅茶プランテーションの中で、「フェラル（野良的）なもの」として「多種との関係性」が生み出されている。逆に言えば、こうした人間と植物との間の親族的な絆は、茶栽培のモノカルチャーが生み出した、リメイクされた自然と人間の間で生み出されたものであるのだと言えよう。つまり、リメイクされた自然が、人間との間で新たな関係性を生んだのである。「多種との関係性」は、そこでは、プランテーションというインフラを介して生み出されたのである。

(2) 代替経済

ベスキーは、「病気の景観における疲弊と持続：インドのドーアルズにおける安価な紅茶とモノカルチャーの仕事」[Besky 2019]と題する論考の中で、「代替経済」を示している。ドーアルズ地方では、茶樹は何十年にもわたって酷使された果てに、機械は古くなって修理する必要に迫られるようになる。また、フルタイムの労働者を支えるためには、あまりにも大きなコストがかかりすぎるようになる。そのため、経営者は、紅茶プランテーションが「病気」だと宣言し、プランテーションを閉鎖するだけでなく、労働者への賃金や手当の支払いを停止する。

そこで、重要なことは、紅茶プランテーションが完全に放棄されたわけではないということである。プランテーションは休業を宣言するのだ。その間、多くの労働者がプランテーションの中に残ったままである。しかし、こうした状況下でも、労働者たちはプランテーションを辞めたり、他の地域に移住したりすることはない。紅茶プランテーションでは、経営者は医療や学校、住居、食事などの暮らしに必要なインフラが整備されているため、労働者たちはプランテーション以外の場所で生きていくことなど考えない。むしろ、人々は、家族何世代にもわたって暮らしてきたプランテーションを再開してくれることを期待しながら、引き続き、諸施設を利用する[Besky 2019 : 35]。

研究成果の概要 (つづき)

プランテーションをプランテーションとして維持するためのリース契約は茶樹と土壌をどんどんと疲弊させていく。しかし、プランテーションを定期的に閉鎖することが、植物とそれをケアする人間をともに回復させることにつながるという見通しのもとに、ドールズでは茶栽培というモノカルチャーが存続させられてきている。居住、衣類、食事、医療などの会社が供給するインフラと紅茶プランテーションは、人間のコントロールを超えて、疲弊しながらも持続せざるを得ないという「代替経済」を生み出している、ベスキーは論じている[Besky 2019:31-34; 奥野 2022:113]。

3. 静岡県の茶栽培をめぐる考察**(1) 多種との関係性——「川根茶魂」**

川根本町では、立春から七十七夜の日、献茶式は神式により執り行われ、町の茶業関係者が茶という植物と、人間の揉み手による川根茶生産に関する先人の労苦に対して敬意の念を表すために、毎年、「川根茶魂」を祭祀する献茶式を行っている。儀礼は、神式で執り行われる。祭壇には、「川根茶魂」という4文字が刻まれた木札とチャという植物が設置されているだけでなく、今年に手揉みで作った煎茶や野菜、果物、川の魚などといった地元の農産物が供されている。そして儀礼を行う際に、神社の祭司が「川根茶の振興に向けて、引き続きお力添えをいただきたい」という言葉を唱えている。それは、チャという植物と亡くなった祖先からの「力」とも言えるだろう。

川根本町では、かつて茶魂という観念は存在しなかった。茶栽培が行われるようになった後に、茶そのものをうまく生育させるために、茶に力や魂の持つ存在だけでなく、気候、山、土などに力の持つ存在が認められるようになったのではないだろうか。人間が作り出した茶栽培というモノカルチャーを経て、茶は魂を有する存在として立ち現れたのである。逆に言えば、茶園というインフラがなければ、自然は魂や力を有する存在と見なされなかったのではないだろうか。その意味で、「フェラル・バイオロジー」の枠組みに照らして述べれば、川根本町の茶魂とは、茶園とインフラを介してリメイクされた自然のことであると考えうるだろう。

(2) 静岡県茶産業の「代替経済」

現在、静岡県の多くの茶農家が、地理的特性による大規模な経営困難や高齢化、後継者不足、近年の茶価の低迷、リーフ茶需要の減少という様々な課題に直面し、茶園面積を減少し一部の茶園の放棄も散見されるようになってきている。このように、茶栽培における植物、土、製茶機械、人間すべてが疲弊しているように見える。そこでは、茶栽培のモノカルチャーやインフラが疲弊しながらも持続させなければならない状況にある。そのため、茶に付加価値が与え始められている。本研究では、ベスキーの言う「代替経済」の枠組みに沿って、川根本町の「フェラルなもの」の利用と東山地域の「茶草場農法」という二つの事例を通して、茶栽培における「代替経済」を描き出した。

茶のブランド化と観光化が進んでいる中で、茶農家たちは仕上げ茶ではなく荒茶しか販売しておらず、ほとんどの荒茶は、低価でJAや茶商に販売している。彼らは、茶の生産コストが高くなる一方で、価格は安くなり、利潤を得ることができなくなるが、生計を維持するために茶栽培を続けなければならなかったのである。

茶農家たちは、茶の生産量を増加させるために、疲弊した茶園に対して茶樹を維持していくことくらいしかできなかった。そのため、茶産業の衰退と価格低迷に苦しめられた茶農家たちは、茶に付加価値をつけることで、いつか疲弊した茶栽培や茶価が復活することを願うようになった。茶園を手放すという選択肢は想定されておらず、茶をブランド化したり、生物多様性を保護したりして観光地化を推し進めるという、ある種の「代替経済」がそこでは進行していると見るができるだろう。

参考文献

Besky, Sarah.(2013). *The Darjeeling Distinction: Labor and Justice on Fair-Trade Tea Plantations in India*.University of California. Press.

Besky, Sarah. (2019).Exhaustion and Endurance in Sick Landscapes: Cheap Tea and the Work of Monoculture in the Doors, India. *How Nature Works: Rethinking Labor on a Troubled Planet*. University of New Mexico Press.

奥野克巳 (2022) . 「人間以上にリメイクされる自然——『マツタケ』以後のアナ・チン、フェラルなもの人類学」『思想：マルチスピーズ民族誌』103-121 頁、岩波書店。

チン、アナ(2019)『マツタケ——不確定な時代を生きる』(赤嶺淳訳) みすず書房。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

- ① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

① 論文 (投稿中)

「植物をめぐるマルチスピーシーズ民族誌：茶栽培におけるフェラル・バイオロジー」
『文化人類学研究』第24巻、2023.

② なし

③ なし

④ その他

<学会発表>

「植物をめぐるマルチスピーシーズ民族誌：茶栽培におけるフェラル・バイオロジー」
第24回現代人類学会総会、2023年1月28日、於：ZOOM.

<英語論文の翻訳>

張威・保坂昇寿共訳、奥野克巳監修、アナ・チン(2017). 「完新世の復活に対する脅威は生存可能性に対する脅威である」 https://0-ea.art/papers/AnnaTsing_2022.pdf , 2023.

張威・田代周平共訳、Chao, Sophie(2018). 「アブラヤシの影の中で、西パプア・マリンドに散在する諸存在論」. 以文社ホームページにて掲載予定. 2023.